OBOG Magazine

県大の星

SHIGA

USP STARS

USP STARS

01

2017 February

地域人

卒業生の今

KIITO企画スタッフ

中野 優

Yu Nakano

米原市職員

亀山 芳香

Yoshika Kameyama

滋賀県立大学

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

OBOG Magazine
USP STARS 01
2017 February

滋賀県立大学　OBOG Magazine
県大の星　第1号

発行月 ｜ 2017 年 2 月
発行 ｜ 滋賀県立大学　経営企画グループ
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200　Fax.0749-28-8470

企画・制作・編集 ｜ スパイス事業部 / 双林株式会社
アートディレクション / デザイン ｜ 澤田未来（スパイス事業部 / 双林株式会社）
取材 / 編集 ｜ 野田大輔（コメディア株式会社）
監修 ｜ 印南比呂志（人間文化学部生活デザイン学科教授）
印刷 ｜ 双林株式会社

case 01 地域人

中野　優

デザイン・クリエイティブセンター神戸
(KIITO)企画スタッフ

関係性のデザインを通じて地域の課題を解決していく

OBOG Magazine
県大の星 SHIGA USP STARS

USP STARS 01
2017 February

キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。

で、育った卒業生に県大教育の成果を探る インタビュー集、第一号

地域人

卒業生の今

目まぐるしく変わり続ける時代を生き抜き、地域社会に貢献していくには。滋賀県立大学は「協働」をテーマに、実践の中に学びを求めて1995年に開学しました。地域の現場に飛び込み、立場も価値観も異なる人々といっしょになって課題を見つけ、問題点を洗い出し、アイデアを出し合って解決に向かう。その牽引者を育成することが目的のひとつです。

「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」というモットーのとおり、学びの場は琵琶湖と周辺地域のすべて。教科書は、地域の自然や産業、歴史や文化と調和的に暮らす人々の生き方です。

琵琶湖で育った稚鮎は他所の河川に放流すると見違えるように大きく育つといわれるように、ここで学んだたくさんの卒業生が、様々な地域、あるいは職業の最前線で活躍しています。その活躍ぶりと県大での生活とのかかわりをひも解くべく、インタビュー集を定期発行することになりました。

さて、記念すべき第一号は**「地域人」**として活躍する卒業生たち。
彼らの言葉を通じ県大のイメージが少しでも伝われば幸いです。

市役所職員
亀山　芳香
Yoshika Kameyama
岐阜県立関高等学校卒業
2004年度 人間文化学部地域文化学科卒業
2009年度 人間文化学研究科地域文化学専攻修了

KIITO企画スタッフ
中野　優
Yu Nakano
京都府立洛西高等学校卒業
2007年度 環境科学部環境建築デザイン学科卒業
2009年度 環境科学研究科環境計画学専攻修了

KIITO企画スタッフ
中野　優
Yu Nakano

略歴：

近江環人第３期生。大学在学中「とよさと快蔵プロジェクト」代表として古民家改修を通したまちづくりに関わる。
2010年、信楽陶芸トリエンナーレ2010「信楽まちなか芸術祭」にて、窯元とデザイナーの商品開発「信楽ライフ・セラミックス」に携わる。
2011年よりデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）に勤務。
＋クリエイティブの視点で社会課題解決を目指し、子どもの創造教育プログラム「ちびっこうべ」や行政、民間、地域などのコンサルティング事業を行う。

KIITOのチーフスタッフとして住民とともに地域の課題に取り組む

デザイン・クリエイティブセンター神戸（以下KIITO）はユネスコのデザイン都市に認定された神戸市が2012年に開業した、人材の育成・集積・交流の拠点です。

運営の根幹となるのが「＋（プラス）クリエイティブ」という考え方。市民自身が身の回りの課題をテーマに、デザインやアート、独自のアイデアや新しい視点をプラスすることで解決を目指し、生活をより豊かに楽しくしていくことを目的としています。その実現に向け、イベントやレクチャー、ワークショップなど、さまざまなプロジェクトを展開してきました。

私が担当しているプロジェクトのひとつが「＋クリエイティブゼミ」です。高齢者問題や観光、子育てなど、神戸市が抱えているいろんな社会的課題ごとにゼミを開催し、約3ヶ月をかけてその解決法を見つけていきます。市内在住の学生や主婦、高齢者、市の職員、またデザイナーやコピーライター、編集者など、やってくる人も多彩。毎回、30人ほどの参加者を5つのチームに編成し、いろんな議論を繰り広げます。

ゼミ終了後は、メンバー有志と一緒に具体的なアクションプランを練り、実際に神戸の町で展開していきます。これまでにたくさんのゼミから生まれたプランが神戸で事業化されてきました。

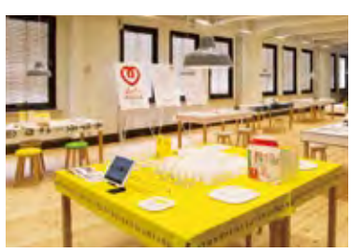
子どもたちの創造力を育むイベント「ちびっこうべ」も第3回

「子どものまちは、神戸の未来。」というキャッチフレーズのもと、KIITOのメインコンテンツとして開催しているのが「ちびっこうべ」です。KIITOの建物を舞台に、神戸の子どもたちとプロのクリエイターがいっしょに学び、考えながら夢のまちづくりをしていく体験型プログラムです。2012年以後2年ごとに開催。2016年は7月にワークショップをスタートし、10月に夢のまちをオープンしました。

メインプログラムである夢のお店づくり「ユメミセ」では、225人の子どもたちが、シェフ、建築家、デザイナーの中からなりたい職業を選び、それぞれのプロに教わりながら約3か月をかけて15のお店づくりを進めます。シェフチームは、実際にシェフのお店で素材のことや調理を学び、建築家チームはその料理にふさわしい空間を設計し、お店を建てる。デザイナーチームは、マークや販売の仕組み、全体のブランディングに取り組む。それぞれが目標を共有することで、よりよい成果を目指そうとする取り組みです。

まずプロがきちんとした知識や技を子どもたちに伝え、子どもたちはそれをちゃんと学ぶ。それをもとに、どう考えて、どう活かすかは、子どもたちに任せるかたちで進めています。

子どもたち自身が自分の中に眠っていたアイデアと出会ったり、友だちとの新しい関係を体感したりできることはもちろん、普段はなかなか交流のないクリエイター同士の学び合いもあります。まただデザイナーや建築家、シェフといった異分野のプロが協働することによって、できることも回を追うごとに増えてきています。



1〜3　神戸の子どもたちとクリエイターがいっしょになってプロの知識や技を楽しく学んでまちをつくりあげていく、体験型プログラム「CREATIVE WORKSHOPちびっこうべ 2016」

不完全なプランニングだから関わりやすい大切なことは「自分ごと化」

2015年にはLIFE IS CREATIVE展を行いました。こちらは、終活や認知症、恋愛や食など、シニアにまつわるいくつかのテーマをもとにラボを立ち上げ、そこにいろんな人が実験しながら何かを見つけ出そうとするプロセスを記録し、展示していきます。それで終わりではなく、生まれたコンテンツをもとに神戸の町でアクションを起こしていく。「ばんじゅ」は成果のひとつです。おじいちゃんたちが町のパン屋さんで本気になってパンづくりを学び、自分たちの町でカフェを開き提供する。いわば、おじいちゃんたちの新たな生きがいと、その実現に向けた技術を育てるプログラムです。また、おばあちゃんたち向けには「大人の洋裁教室」を開催して技術を学びながら町の中で居場所をつくっていくということも行っています。

「＋クリエイティブゼミ」や「ちびっこうべ」と同じように、ここで考えられたコンテンツをどれだけ町に還元できるかが私たちの課題です。例えば、デパートの屋上で人気のキャラクターショーをやれば、公演中は大賑わいでも終了すれば誰もいなくなる。KIITOがやろうとしていることはそうではなく、そのショー自体にどう観客が関わっていけるかということ。みんなが参加できて、いかに「自分ごと」にしていけるかが重要なのです。必要なのは計画され尽くしたプランではなく、誰にでもかかわることのできる余地や余白を残した不完全さかもしれません。考えてみると、これって「放流教育」と呼ばれる県大の教育そのものだと思っています。

人と人との関係性を築くそれが県大で身につけた、私のデザイン

学生時代の恩師、松岡拓公雄先生から学んだのは、建築設計だけではなく、建物と町、建物と人、そして人と人との関係性をどう築くかということでした。建物が建てられる前と後、たとえば、どんなところにどんな場があればよいか、既存の事業をいかに改善していくか、見過ごされてきた界隈の資源をどう活用するか、ということです。

KIITOもその一例です。前身は、輸出生糸の品質検査を行う施設として1927年に建設された神戸市立生糸検査所（旧館）です。大正から昭和初期にかけて神戸港における生糸輸出の最盛期を支えました。近代日本の産業や文化を輸出するための重要な拠点だった生糸検査所は、その後役割を終えましたが、一時代を築いた町の文化や界隈性を継承し、新しい価値を生み出す創造の場として生まれ変わったのです。

case 02 地域人

亀山　芳香

米原市健康福祉部くらし支援課

人と人とを結び、地域の文化と安心を守る

きっかけは「とよさと快蔵プロジェクト」への参加

建築を通じた「関係性のデザイン」というテーマにたどり着くきかっけとなったのが、入学と同時に始まった「とよさと快蔵プロジェクト」への参加でした。県大ならではの地域貢献事業である「近江楽座」の初期の取り組みのひとつで、大学に近い豊郷町の古民家再生によるまちづくりを目的としたものです。

建築学生ですから解体もしたいし再生に向けた設計もしたい。でもうまくつくり直せたとしても人が住まなければ存続させることができません。じゃあ私たち自身が実際に住めるシェアハウスにしよう、家賃を貯めて次の改修資金にしよう、と持続できる仕組みを考え、地元のNPOや地域の人々にかけあい、了承いただいた上で改修に取り組みました。

実際、そこに住んで地域の人々と交流することで町の課題も見えるようになりました。例えば、地域の社会福祉法人と連携して学生のシェアハウスの一角に高齢者が立ち寄れる場所をつくるなど、地域の皆さんとの協働で課題を解決していくという経験をさせてもらったのです。

その後、改修民家は11軒に増え、10年以上経った今も学生たちが運営に関わっています。

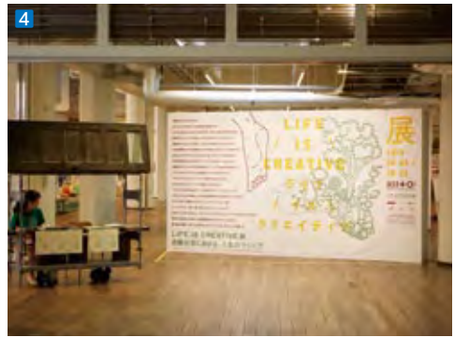
町の人だけでは、問題を感じていてもどう解決すべきかと悩むところもあったでしょうし、学生だけでやっていたら収拾のつかないことになっていたかもしれません。やはり地域の皆さんや様々な専門家の方々が受け止めてくれたからこそ実現したことだと思います。

学生時代に豊郷で経験させてもらったことと、いま神戸で取り組んでいることと、まちのスケールに違いはあっても根本は同じなのだと思います。

大学というフレームに収まらない学びと経験それがかけがえのない宝物

私の場合、学生時代は公私ともに地域とのかかわりの中で過ごしてきました。いざ就職となって、学んできたことと異なる分野へ進む人も多いと思いますが、過ごし方ひとつで将来の生業を決定づけるようなキャリアや人間関係をつくっていくこともできるはずです。例えば、学生時代は、学校で勉強し、別の場所でアルバイトをする、という二極化的な考えに縛られがちですが、勉強になるお金の稼ぎ方や、お金をもらいながら学ぶ方法だってあります。その行動が何につながるかを想像しながら取り組むことが大切だと思います。

驚くかもしれませんが、県大には校門も大学を取り囲む壁もありません。これは、環境科学部教授を務めた故 内井昭蔵先生がマスターアーキテクトとして、様々な建築家が関わった校舎や、学内のランドスケープ、学外の琵琶湖や荒神山、周辺の集落といった自分たちをとりまく様々な環境との関係性をデザインされた結果だと思います。キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。大学に収まらない勉強ができる、そこが滋賀県大の魅力です。



7 神戸の観光をテーマにしたゼミ参加者の提案をきっかけに生まれた「date.KOBE プロジェクト」

8 KIITO でのミュージアムロードの活性化をテーマにしたゼミで参加市民のアイデアから生まれた「美かえるカラフルプロジェクト」

4 高齢社会の未来を考えるトライアルの場として、8つのテーマに向き合うためのキックオフとなる“高齢社会における、クリエイティブな人生のつくり方”プロジェクト「LIFE IS CREATIVE展」

5 世界中からクリエイターによる優れた防災活動を集め、共有・連携・相互学習できるプラットフォームを創設していくプロジェクト「EARTH MANUAL PROJECT」

6 多様な世代の参加者がディスカッションを行い、神戸の社会的課題を解決する方策を導き出す「＋クリエイティブゼミ」

考古学を学びたい、熱い想いに応え先生が推薦してくれたのは初めて耳にした大学

出身は隣の岐阜県なのに、受験するまで滋賀県にさえ来たこともなく、実は県大の存在すら知らなかったのです。

もともと歴史に興味があり、考古学を学べる他の大学を目指していました。ところがセンター試験で思いのほか得点できず、浪人を覚悟して先生に相談をしました。ここなら君のやりたいことができると思うよ、と勧めてくださったのが「滋賀県立大学」でした。思えば、ここが転機でしたね。考古学にもかかわりの深い地域文化学科を選びました。

なんとか合格し、入学してまだ5月にもならない頃、考古学研究室の「調査員募集、学年不問」という張り紙を見てすぐに申し込みました。当時、一回生で研究室に出入りできる大学は他になかったかもしれません。

先輩たちと一緒に中国へ行ったり、彦根城の発掘調査に参加したり、出土した遺物の実測調査などを経験させてもらいました。まさにやりたかったことでした。

クラスが少人数だったこともあり、みんなが仲良く、友だちもたくさんできましたので、学校生活は毎日楽しく、充実していました。

町並みの成り立ちを調査するゼミで古民家の魅力を体感する

3回生から始まるゼミの選択で、それまで聞いたこともなかった「保存修景」という分野と出会いました。埋蔵文化財といったいわゆる考古資料だけではなく、地面の上の建物や町並みから地域の文化や歴史を探り、景観の保存や整備に役立てようとするものです。そこで、町や集落の成り立ちやプロフィールは民家に最も色濃く現れることを知りました。

建物から地域の文化を見る、人間が手を加えて今も残っている景観からその背景にあるものを考えようとする考現学的なおもしろさにのめり込んでいきました。実際に、歴史都市である近江八幡をはじめ様々な町並みを調査し、町並みをくまなく見ていると、その景観を培ってきた歴史や文化が少しずつ鮮明になっていったことを覚えています。

こうした調査を重ねるうちに、古民家への興味がどんどん強くなっていきました。ところが、現実には空き家化が進む一方。放っておけば建物と一緒に日本の伝統的な景観や文化も朽ちてしまいます。なんとか残せないものか、というテーマが自分の中に生まれたのです。

そこで、大学発の地域貢献事業「近江楽座」に「限界集落の村おこし」を提案し、採択いただきました。それが「男鬼楽座」です。限界集落とは、過疎化などで人口の50％以上が65歳以上の高齢者になって冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になっている集落を指します。とくに彦根市から多賀町にかけての山間には限界集落や、すでに無人化してしまった消滅集落が点在していることを知り、その記録だけでも残しておきたいと、「近江楽座」のプロジェクトが始まる前から彦根市男鬼町の山村集落調査を続けていたのです。

失われつつある茅葺き民家の調査から再生に至るまでの貴重なプロセスを経験

男鬼町の山村集落は、鈴鹿山系の北端に近い山中を深く切り込んだ谷沿いにあります。日本海側からの北西風と琵琶湖からの西風により、冬は50㎝に及ぶ積雪に見舞われ、急病人が出ても医者を呼ぶことさえままならなかったといいます。集落をめぐると、道に沿って茅葺きの民家が立ち並び、まるでI960年代の山村にタイムスリップしたかのような衝撃を受けたことを覚えています。

まず茅葺き民家を対象に建物を評価するための調査を開始し、続いて多くの人に関心を持ってもらうためにシンポジウムなどで情報発信を行いました。地域とのつながりもでき、協力者も増える中で、続いて茅葺き屋根の補修に取り組みました。ところが肝心の職人さんや材料となるススキも減る一方。必死になって探しました。見つからないなら栽培しようと、山間の空き地を借用し、茅場づくりも試みました。すでに離村した集落に遺された茅の刈り取りなどもさせてもらいました。茅の葺き替えには、数少ない茅葺き職人さんに弟子入りするつもりで力を借り、他大学生の協力も得て行いました。何もかもが初めてのことです。一時的には本気で茅葺き職人になろうかなと考えたこともあります。

そしていよいよ再生、しかし住む人がいないのなら結果は同じです。そこからは空き家の見学会や集落のまち歩きイベント、さらには移住を勧めるPRまで、地域の皆さんとともに必死で取り組みました。

地域を訪ね歩くうちに湖北があこがれの地に米原での就職、永住を決意

男鬼町をはじめ、いろんな町並みや集落を回るうち、とくに魅了されたのは湖北の古民家でした。豪雪地帯とあって、柱がどっしりとしており空間も大きく、なんともいえない懐の深さを感じさせてくれるのです。この民家や景観を残していけるような仕事に就きたい、この地域に住みたいと、いつしか考えるようになりました。空き家や集落の調査を行ったり、まちづくり懇話会などにオブザーバーとして参加したり、また地域の人は空き家に対してどんな意識を持っているか、アンケートや聞き取りを行いました。当然ながら存続を強く望んでいることを知りました。懇話会に出席しながら、地域おこしイベントなどにスタッフとして参加し、地域の皆さんとの交流が深まっていくたびに、その想いが確信に近づいていったのです。

ご縁あって実際に古民家に住んだこともありますが、それほど不便に感じなかったことも理由の一つです。

大学院に進学して進路を検討し始めたころ、これからもこの地域の皆さんと活動していこうと決意し、米原市の採用試験を受けました。公務員試験の準備も十分ではありませんでしたが、他の行政は考えず、落ちたときは茅葺き職人になると決めていました（笑）

市役所入庁後3年間は商工観光課勤務民家ホームステイのコーディネートで実感した地域の魅力

市役所に入って最初の3年間は商工観光課で働きました。デスクワーク中心のお役所仕事のイメージとは異なる、現場と向き合う仕事です。例えば、市の事業に関する聞き取り調査を行う場合は、どなたにヒヤリングできるかを探し出し、アポを取って日程を調整し、出向いてお話を伺う。こうした住民さんとの交流がスムーズにできるのも、研究室や近江楽座での取り組みを通して地域の方とお話できる機会をたくさんいただいたからだと思います。

専門ではありませんが、大学の呼びかけに応えて「県大jiman」という広報誌をつくっていた経験は米原のPR誌づくりなどに生きています。これからのPR誌は、市ではなく地域の人の手でつくっていけたらもっといいでしょうね。今は市の職員という立場ながら、地域のミニコミ紙などの制作もお手伝いさせてもらっています。

最も印象に残っているのは、中高生向けの田舎暮らし体験事業です。姉川上流地域の民家に泊まって農業などを体験してもらうのですが、感動している子どもたちの様子を見て、この地域にはたくさんの魅力があることを改めて実感することができました。

農家を一軒一軒回って協力をお願いし、何クラスもの生徒を受け入れるための体制を整えることは簡単ではありませんでしたが、ありがとうございましたと涙を流して別れた子どもたちが、ひとりでもまたここへ来たいなと思ってくれたら嬉しいです。

高齢化・過疎化に備えた地域の交流拠点「お茶の間」づくりに参画

4年目、福祉支援局に移って携わったのが「地域お茶の間創造事業」です。まず地域の交流拠点づくりを支援し、元気な皆さんが支援を求める高齢者をサポートできるような、互助の仕組みづくりを目的としています。

第1号拠点となったのが、私もお手伝いさせていただいた上板並「みんなの家」です。お茶を飲みながらお話できる憩いの場所であったり、旬の産品を使ったお惣菜を販売する地域ビジネスの発信地点になったり、地域の皆さんの意向で利用方法も広がっていきます。もちろん災害時は避難場所にもなります。

こちらでは、どこにどんな人が住んでい

地域貢献事業「近江楽座」に「限界集落の村おこし」を提案し、採択された「男鬼楽座」
職人さんと学生が力を合わせて取り組んだ茅葺き屋根の補修。

市役所職員
亀山　芳香
Yoshika Kameyama

略歴：

近江環人第1期生。
2010年４月から米原市職員。2010～2012年度　商工観光課で観光振興を担当。観光協会、ボランティアガイド協会、ほたるまつりや雪合戦などの実行委員会事務局を務める。2013年度から福祉支援局（現在はくらし支援課）で地域福祉を担当。地域でお年寄りなどが自由に集うことのできるお茶の間づくりに取り組む。

学生時代から編集に関わった地域の冊子など。

るかマップをつくり、有事の際は誰が誰を迎えに行くか決めているんです。そうすれば安心ですよね。

2016年の5月に約2年間の育児休業から復帰

職場の皆さんと家族の理解や協力のおかげで、子育てと仕事を両立しています。

育休中に課名は「福祉支援局」から「くらし支援課」に変わり、業務内容も多岐にわたっていました。継続して地域お茶の間創造事業を担当していますが、地域の支え合いの体制づくりや、保健・医療・福祉サービスを包括的に提供する施設の管理運営などにも携わっています。

これからも、誰もが地域で自分らしく暮らし続けられるように、みんなで支え合い、安心して元気に暮らしていくことができるまちづくりを目指して邁進していきたいと思います。

やりたいことが見つかる、伸ばせる それが滋賀県大の魅力

県大は、やりたいことがあれば伸ばせるし、いまなかったとしても、ここに来ればなにかを見つけることができ、さらに広げることができると思います。どうぞ貪欲に、自分の中に眠っているものを目覚めさせてください。

1〜5 地域のみなさんが自由に集うことのできるお茶の間「みんなの家」。有志の防災組織「サンダーバード」と福祉委員が協力して空き家を改装し、2013年12月にオープンしました。大きな囲炉裏では、健康への気づかいから地域の未来まで、様々なお話がかわされます。

県大時代の

思い出

USP アーカイブ Archive Vol.1

イラストレーション：GOIC 山本里士（滋賀県出身）

亀山 芳香さんの場合

●〜印象に残っている場所〜

一番長い時間を過ごした保存修景室

カセットコンロや冷蔵庫などもあり、よく夕食を作ってみんなで食べていました。同じお釜のご飯を食べたことでゼミ生の絆も深まり、日頃の調査や活動でチームワークを発揮できたと思います。

●〜こだわりの一品〜

いつも持ち歩いていた野帳

フィールドワークの必須アイテムとして生協ショップで購入していました。じつは、卒業後も愛用していて、今も仕事で打ち合わせをするときや現場に赴くときなど必ず持っていきます。

●〜かけがえのない出来事〜

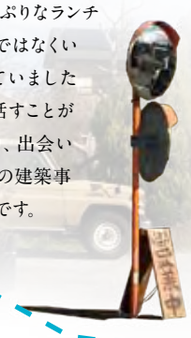
近江楽座の学生委員会発足

いろいろありますが、なかでも近江楽座の学生委員会という組織を立ち上げたことは思い出深いですね。近江楽座に取り組んでいる学生間の交流を図り、相互の活動をより発展させていこうと、有志で定期的に集まりながら、様々な企画を打ち出した経験とそのときの仲間が、大きな財産となっています。

中野 優さんの場合

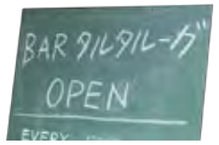
●〜印象に残っている場所　その1〜

西村カフェ（現エイトヒルズ・デリカテッセン）



県大の北側にあるお店です。当時は、おじさんとおばさんが二人で頑張っていました。野菜と栄養たっぷりなランチをよく食べに行きましたよ。建築だけではなくいろんな学部の先生や生徒が集まっていましたし、お店の雰囲気がいいから気軽に話すことができた。学部を超えたたまり場であり、出会いの場でした。2階には恩師、松岡先生の建築事務所もありましたから特になじみ深いです。

●〜印象に残っている場所　その2〜

豊郷タルタルーガ

「とよさと快蔵プロジェクト」で知り合った料亭「遊亀亭」の一角にある土蔵を借り、自分たちで改修してつくったバーです。プロジェクトに携わりながらわずかでもお金を稼げる場になりましたし、なによりも出会う人の幅が広がった。親しくなった地域の人が古民家物件を紹介してくれたりしました。思い出になっているのは西村カフェと同じく、出会いが広がった場所といえるかもしれません。ここはいまも後輩たちが運営してくれていますが、それぞれが「自分のお店」と思って好きなようにやってくれればいいと思います。